

「本郷高校と私」

昭和58年卒業（高校35回生） 小島時和（こじまときかず）
正智深谷高等学校（埼玉県深谷市）サッカー部総監督 保健体育科教諭



0 こんな私に

埼玉県高校サッカー関東大会予選真っ只中の令和7年5月頃、竹野谷君が本郷高校サッカー部同級生である小林英夫君を介して私に、「同窓会誌に執筆してくれないか」という依頼がありました。竹野谷君は本郷高校同窓会役員であり、同窓会誌発行にかかわっているとのことでした。彼と小林君とが三年間同じクラスだった縁で、私に声がかかることになりました。

本郷高校卒業生で各界において活躍する人たちが執筆するような同窓会誌の執筆者として私が選ばれたことが感慨深く、私のこれまでの経験を同窓生の皆様に披露することで同窓会活動に少なからずの協力、何かしらのご恩返しになればと、一役買おうと考えた次第です。これもご縁と感じご一読いただければ幸いです。

伝統と歴史があり、昨今の大学進学実績では、東京の並み居る有名進学校にひけをとらない本郷高校卒業生である私は現在、埼玉県深谷市に所在する私立正智深谷高等学校に奉職して27年目、先年還暦を迎え現在61歳になりました。

永年率いたサッカー部の監督業に区切りをつけ、令和7年4月から総監督となり、後進に監督としての主戦場を託し、一步引いて全体を見渡す立場で高校サッカーに関わっています。

私のような小さな少年がサッカーと出会い、サッカーに目覚め、こうしてサッカーに関わり続け、全国大会に出場し、Jリーガー数名が輩出するまでのチームを育て上げられたきっかけ、根本を私に与えてくれたのは本郷高校での3年間の経験です。

1 本郷高校との出会い

東京都練馬区立田柄（たがら）中学校に入学した私は、1年次の球技大会でサッカーと出会いました。チームで協力して得点を狙い、ゴールを奪った時の感動を味わい、一瞬でサッカーの虜になりました。

早々とワールドカップ出場を決め、海外クラブで活躍する日本人選手が多くいる現在のサッカー界と比べ、当時は、野球に比べサッカー人口は決して多くはなく、何はともあれ野球、野球中心の世の中という様相でした。

田柄中学には過去にサッカー部はあったのですが当時は存在せず、体育の授業と球技大会でしかサッカーができない環境でした。野球全盛の当時、サッカーをやろうという中学生の現状が想像されるところですが、私たちはそこでとどまりませんでした。

中学2年は4月に新任の先生でサッカー経験のある先生が赴任されました。「サッカー部を復活させてください」サッカーと出会い、その面白さに目覚めた私たちは中学2年でサッカー部を復活させたのです。新任の先生と体育の先生が協力してくれたことが大きかったです。

休部状態であったサッカー部を「復活運動」のもと復活させた私のポジションはゴールキーパーでした。このポジションに「はまり」、ボールを止める楽しさ、褒められる嬉しさに浸りました。

この時期に私の母校となる、本郷高校との出会いがあったのです。



2 上を目指す

中学でサッカー部を復活させた私は日々サッカーを楽しんでいましたが、それほどの結果を残すほどではありませんでした。そんな私は更に上を目指したくなります。「東京の高校サッカーはどこが強いのだろう？」今でも忘れません、昭和53年、私が中学2年の年の冬の全国選手権に本郷高校

が東京代表（当時は1校代表）として出場します。

当時は元旦が開会式でした。お正月の晴れやかな雰囲気の中私は、西が丘サッカー場（北区赤羽）に本郷高校の試合を友人と観戦に行ったのです。結果は本郷高校が滋賀県代表守山高校に2-0で快勝、勝利を収める本郷高校の選手の姿を直接見たことが、本郷高校受験を決める決定打となりました。「本郷高校でサッカー部に入部し全国選手権に出場しよう」という、中学2年で見た夢の始まりでした。

③ さあ本郷高校へ

中学3年生になり受験期を迎えた時も「本郷高校でサッカーをやりたい」との思いに変化はありませんでした。更に、「将来は教員になってサッカー指導をしたい」という夢も生まれていました。

これは、中学3年生最後の大会を終え引退のあと、後輩に教える機会があり、「人に何かを教えること」に充実感を得た経験があったためです。「将来、学校の先生になれたらいいな、、、」こんな夢も抱いた少年がいよいよ本郷高校普通科を受験、合格通知を手にすることができました。

都立高校受験も控えていたのですが、当時は公立高校受験に「学校群制度」というものが導入されており、最終進学先が不透明な受験制度に希望が持てず、この本郷高校で夢を叶えると決めました。

合格から入学までの時間、全国大会に出場するような部活に入部するのだから、事前に体力的に準備して進学しなくてはとの思いから、自主トレーニングにも励んで本郷高校の門をくぐりました。

④ 覚悟を決め取り組んだ部活動

「練習は厳しいだろう」などという不安もありましたが、「自分が通用するかしないかよりも覚悟を決めとにかく頑張る」と覚悟を決め入部しました。

本郷高校は男子校で校舎へは土足で入る、床が打ちっぱなしのコンクリート、雑巾掛けをするような床ではないことに違和感を感じることもありました。また、黒い詰襟制服ばかりなので、「(学校)全体がいつも黒い」という印象が強く、実は少々なじめませんでした。掃除も教室を掃くというより庭掃除をしている感じがありました。

当時はサッカーやラグビー、ボート、陸上での知名度が高く、サッカーとラグビーの知名度が一番高かったように記憶しています。

サッカー部に入部した私の在籍クラスには私の他に2名入部希望者がいて、いよいよ本郷高校サッカー部の練習に参加しました。練習初日に参加したのが80人位でしたか、とにかくたくさん参加していました。まだ、出来るところまで無理なくていいという参加条件でしたが、次の日の練習にはその半分が練習に参加というように、本郷高校サッカー部の練習を体験して残った1年生部員は半分ほどになっていたと思います。そして、個性的な同級生の存在が見えてきました。

⑤ 本格的入部になる際に

本入部の覚悟を決めた私達1年生部員は先輩から「丸刈り（3分刈込）指令」が出ます。現在では想像できませんが当時は多くの高校が丸刈り部員でした。これで去っていった新生生もいました。

生まれてからこれまでに丸刈り経験のない私でしたが、本郷高校サッカー部正式1年生部員になる覚悟が上回ったのか、迷うことなく床屋に行きすぐに刈込みを頼みました。「やるしかない」、この一心でした。帰宅した際、家族が初めて自分の丸刈りを見た時の驚きの表情が忘れられません。「まあ、どうしたの!？」という表情でした。

⑥ 1年生の試練

当時の本郷高校サッカー部では朝練習を自主的に行っていました。それにあわせる形で1年生は各種のいわゆる「庶務・雑用」体験が始まりました。朝7時には学校に登校し、地下にある部室へ向かい、ボールを磨きます。当時のサッカーボールは革製で野球のグローブのような手触りのものでした。表面の白い部分が剥がれた革製のボールを毎朝何個も磨きます。これに慣れるまで大変でしたが、つばを使って布でゴシゴシとこすります。すると泥汚れ

がいい具合に取れ、ピカピカに光ります。練習になればすぐさま泥んこになるボールなのですが、これは本郷高校サッカー部の「伝統」でした。こういった下積み行為は私にとっては、新鮮というか、特に反発はなく、「こういうもんだ」と思い、ほかの1年生部員と雑事に励みました。

7 半分からさらに減った新入部員

いよいよ練習が本格的になってくると「体力的にきつい」などという理由で1年生部員が退部していきました。個性的な技術力のある仲間を含め、体験入部に集まった最初的人数から約3分の1に減り、さらに数人が欠け、「精鋭」の1年生部員が20数名残ったと思います。練習はもちろん毎日、オフはありません。「走り」がとにかく多く、基礎練習、シュート練習、GK練習、対人練習、そしてラストの筋トレ、ダッシュ20本、グラウンド30周走などと、正直きついものでした。休日は一日5時間練習の日もありました。私も相当くたくたになりましたが、「これで強くなる」と信じた自分が弱気な自分に勝り、何とか練習についていくことができました。しかし、



気がつくと1年生部員は最終的に19名となっていました。

8 クラスの様子、思い出

本郷高校では当時、狭山湖まで移動して行ったマラソン大会という恒例行事がありました。10キロほど走るもので現地集合現地解散でしたが、私たちは巣鴨へ戻り部活動でした。さすがに練習最後の30周走が免除され、「嬉しい」と感じてしまう当時の私でした。

男子校ならではの、雰囲気にも慣れてきました。「住めば都」、結局私には合っていたように思います。自宅のある練馬区から東武東上線と山手線乗り継いで巣鴨駅下車、そこから徒歩で学校まで通いました。



帰りは必ず「松よし」という駄菓子屋で「チェリオ」を仲間と一気に飲みし、一日の練習を振り返ることが定番でした。皆が「おばば」と呼ぶ別の駄菓子屋へ先輩から買い出しを頼まれ走り、「ストロール」というアイスや「塩せん」や「カップラーメン」などを買って帰ったのも今では懐かしい思い出です。

「昔は麻布開成本郷って言われてたんだぞ」。この言葉は、当時サッカー部部長でいらした野口泰彦先生の口癖でした。(言葉は)古典の授業で、なぜか常に竹刀を持って入場され、本郷高校の歴史を私たちに伝える発破をかけてもらったことも懐かしい思い出です。

1年次では、部活の疲労が取りきれず、正直なところ、授業中は睡魔との戦い、というよりほぼ負けていました。クラスの席が出席番号順で、私は常に教壇の前の先頭の位置が多く、授業で寝ないように自分と戦っていました。睡魔がくると手をつねったり、シャーペンで腿など突いたり、なるべく下を向かず、先生を見るようにとやっていました。先生を見ていても睡魔は襲ってきます。



ある時突然身体中に電気が走りました。何が起きたかわかりませんでしたが、どうやら寝てしまったようで、寝

ているところを竹刀で叩かれていたようです。「昔は麻布開成本郷って、」と私たちに発破をかけてくださった野口泰彦先生の「ありがたい一撃」に、クラスは爆笑していました。今では考えられません。また、生物の時間でした。寝ないように頑張って目を細くして耐えている姿を見ていた先生が、授業の途中で、「小島はいつも目を細くして授業を聞こうと戦っている。その姿勢は評価できる」と褒められたこともありました。この経験から私も教師になってからは自分の授業中にこのような生徒がいると当時を思い出し褒めてあげています。

2年次での学校行事の楽しみの1つに修学旅行があります。現在の高校の修学旅行は、海外旅行は当たり前のように行っていますが、当時は国内が主流でした。しかし、本郷高校は、われわれの代が初めてとなる、海外（韓国）での修学旅行が行われました。

韓国では日本の高校生が修学旅行に来るとテレビのニュースに報道されていたそうです。当時の韓国はまだ戒厳令が出ている頃で、ソウル、慶州、釜山の都市を2班に分かれて別方面から周りました。

旅行の内容も、韓国の文化的な施設を回るものでした。遺跡、古墳、南北分断の38度線付近、寺社仏閣など、買い物の場所は限られました。ただ、バスから降りると私たち高校生に「シェンエンシェンエン（1000円）」とおじさんおばさんがやってきて私たちに買い物をすすめます。私は購入しませんでした。購入した友人からもらった財布は意外と悪くない出来栄でした。自由時間はホテル内のみで、お土産も決められたところといった感じで、街を歩く等は全くありませんでした。

そんな中、ソウル中央高校との交流会があり、日韓ではサッカーのライバル国であるという意識が当時から強く、共にサッカーが強い高校という話から、親善交流試合をやろうということになっていました。メンバーは、学年をいくつかに分けて旅行をしていたため、その日に集まったサッカー部員ギリギリで行いました。試合は相手の全校応援の中、親善試合らしく2-2の引き分けで終わりました。試合終了後、ユニフォーム交換をし、写真撮影をしました。



そして、試合をしたソウル中央高校の部員たちと近くのサウナでお風呂に入り、言葉が通じない中、楽しく交流をしました。良い思い出になっています。指導者になってから韓国高校生チーム（ボーイン高校、大邱高校）を招待したり、こちらが韓国遠征を行ったりしてきたことを思い出すに、高校時代の韓国高校生との親善試合の経験が何かしらの導きをしているように思います。

9 サッカーと向き合う日々

入部から最初の1ヶ月は、親も相当心配していたので、毎日のお弁当や帰宅すると私のガチガチになっている体を時々マッサージしてくれました。多感な時期で素直にありがとうと言うことができなかつた自分でしたが、親となった今では当時の親心に心を揺さぶられます。

そうこうするうちに、次第に体が強くなってきたのがわかりました。走力はもちろん、今でいう「体幹」といった基本的な体の強さが、サッカー部での走りを中心とした練習に歯を食いしばってついていく中で身につけてきました。自分でもよくこの時期にしがみついて辞めずによく頑張れたものだと思います。そういう根性が自分にはあったということなのでしょう。

1年生の毎日は「初めて経験する一日」です。本郷高校サッカー部は夏合宿を菅平高原で1週間ほど行っていま

す。まさに朝から晩までサッカー漬けです。監督の阿出川先生の掛け声のもと練習に励みました。必死に鍛えていた合宿中、当時の先輩から「おまえは、厳しい練習に全力で頑張っているな」と褒められたこと、また先輩から「合宿はきついけど頑張れ」と励まされたことは今でも記憶に残り、しごかれた辛い記憶よりも、乗り越えた自分、支えてくれた先輩方との思い出が上回り、やりきることができた、ひと回り成長した自分がいました。

またある時校内で、同じ中学の先輩がバレー部に所属しており、私がサッカー部に入部してもすぐやめるだろうと思っていたようですが、その先輩から「おい小島、凄いぞ、ここまで来たからにはやめるなよな」と励まされたことがありました。全国大会に出場するようなクラブに後輩が辞めずについて行っていることに何かしらの思いを抱いたのでしょうか。今でも記憶に残っています。

サッカーに関する技術は後からというか、中学では勢いでやっていた、経験も浅く技術も未熟な自分が「サッカー一人」として現在までサッカーに関わり続けることができた礎は、本郷高校での1年生時に築かれたものといっても過言ではありません。

10 本格的な本郷サッカーへ

現在の本郷高校は、人工芝という環境で練習が行われていますが、当時は土のグラウンドで風がふくと埃が舞い、グラウンド整備も大変でした。校歌の中にもありますが「誇りの本郷学園」で「埃（ホコリ）の本郷学園」だからと部長の野口泰彦先生に笑いながら話されたことを思い出します。そのような環境の中、当時から隣の三菱養和の施設には人工芝のグラウンドがありました。このグラウンドに三菱重工（現在の浦和レッズ）のサッカーチームが時々練習に来ていました。三菱のGKは当時の日本代表のGKでもある田口光久さん(2019年11月12日死去)で、この人が日本のゴールを守っているのだと中学から憧れていました。高校1年生の時にボールボーイで三菱対ヤンマーの試合にいった時、田口さんと出会えて、「どこの高校だ」「本郷です」「阿出川さんのところか」「はい」とこんな会話を



をしながらカバンにサインをもらいました。そんな出会いから時々三菱養和のグラウンドに来たときに、本郷のグラウンドに来ることもありました。GK練習を見てくれることがあり、一緒に土のグラウンドで教えていただきました。田口さんは引退後指導者（青森県青森山田高校、埼玉県国際学院高校）として活躍し、その後、指導者としても好意的にさせていただき食事も度々行く関係にまでなりました。全国選手権大会の準々決勝で青森山田戦と対戦した時に駆けつけていただき青森山田高サッカー部は田口さんが発足したチームで正智深谷との対戦に特別な気持ちがあったと話してくれた事を思い出します。

また、本郷の先輩で日本代表入りをしたGK加藤好男さんにも指導を受けたこともあり、今でも当時2人日本代表GKに指導を受けたこと、これも本郷高校へ進学したからだという思いがあります。

私が高校2年生の夏に先輩たちの活躍で都大会優勝の栄冠を勝ち取り、全国大会（神奈川インターハイ）に出場しました。「本郷高校で全国大会に出場する」という目標は達成されました。しかし、自分たちが最上級生となって出場することが最大の目標で、それができて本当の目標達成だと当時の私は強く思いました。「伝統を絶やしてはいけない」と身震いする思いでした。

本大会では1回戦はシード、2回戦に福岡県代表の福岡商業高校に1-0で勝利し、次戦は静岡県代表の清水東高校に敗れてしまいました。その大会は清水東が優勝しインターハイ二連覇を遂げることとなります。私はスタンドからの応援でしたが、全国レベルの試合を体験できたことが大きな収穫で、またこういった大会に出場したいと強く思ったことはもちろん、ここ（全国大会）に来てよかった、そして、本郷高校に入学してよかったと心から思いました。

そして冬の全国大会(選手権)は第60回大会ということで、



昭和56年度 東京都高校総合体育大会優勝記念 '81-6-28

東京都から2校出場することができる大会となり、インターハイ出場の本郷高校にとっては大チャンスでした。

しかし、冬の全国選手権大会東京都予選は都立駒場にまさかのPK負けとなり準決勝敗退でした。先輩が引退しそして私達の代となりました。

11 遠かった全国大会

自分の代はインターハイ出場の先輩の代と比べ実力的に劣っていましたが、とにかく全国大会出場を目指して頑張った日々でした。関東大会東京都予選ではベスト4、準決勝では暁星高校にPKで敗れ、第2関東代表決定戦に回りました。対戦は桐朋高校で先制するも1対1の延長で1点を取られ逆転負けで悔しい思いをしました。その流れでインターハイ東京都予選も負けてしまいます。

高校生活最後となる全国選手権東京都予選はまず、ベスト16まで勝ち上がります。我々の第61回大会は東京代表が1枠に戻り、狭き門でした。翌年の第62回大会以降は東京都から2校出場することができる大会となり我々は狭間の年でした。ベスト8を決める試合は創価高校が相手で、大泉学園高校グラウンドで対戦しました。悪天候の中での「泥沼の戦い」となりました。両者譲らず無得点、PK戦となりました。両者決めていく中、4人目を私が止めます。5人目キャプテン三浦が決め、ベスト8入りを決めました。しかし、準々決勝でもまたも暁星高校と対戦し、0-1で負けて私の高校サッカー生活が終わりを迎えました。



12 「恩師」サッカー部監督 阿出川信夫先生

監督の阿出川信夫（あでがわのぶお）先生には多大なる影響を受けました。「赤点とるなら点を取れ、風邪をひくならタイヤ引け、おばば（学校そばにあった駄菓子屋）で食うなら敵を食え」、「大将」と呼ばれ、赤いジャージがトレードマークで私が高校1年当時37歳の熱血監督でした。「赤いジャージ」にあこがれ、後年教員になって同じく「赤いジャージ」で過ごした時期もありました。現在総監督として携わる正智深谷高校サッカー部ユニフォームはスクールカラーの「緑」と「赤」を前面に出したユニフォームで一貫していますが、「赤いジャージ」の影響かもしれません。

地面に棒で字を書いて戦術を説明するのですが、その字が実にうまかったことをよく覚えています。「監督の言うとおりの練習を繰り返すことが全国で勝つチームにつながる」と信じさせるオーラのようなものがあり、監督の言葉を信じ切って練習に取り組んでいました。自分のプレーや戦績に結果が出ないときなどは、常に「自分の努力が足りない」と考える思考回路となり、更に自分を追い込み鍛錬に明け暮れさせる影響力を持った指導者でした。3年次進路決定の時期になる頃には、「阿出川先生のような指導者に自分もなりたい」と思うようになっていました。



※阿出川信夫先生は2025年9月25日に82歳で亡くなられました。最後に阿出川先生とお会いしたのは2024年3月の春休みに本郷高校を率いてやって来られた時です。現在の指導者も本郷高校出身の岩野監督です。

場所は私のチームの本拠地、埼玉工業大学グラウンドでした。いつもと変わらずお元気そうで、驚きでした。また、2024年度は埼玉県代表として8年ぶり4回目の全国大会（選手権）にチームを率いましたが、全国大会開会式後そのまま巣鴨の本郷高校グラウンドへ直行し調整練習をさせていただきました。今回で3回目の開会式後の調整練習でしたが、阿出川先生も駆けつけてくださり、3つの「あ」、「あわてない」「あ

せらない」「あなどらない」とアドバイスをいただいた事は忘れられません。謹んでご冥福をお祈りいたします。

13 大学でサッカーを

進路決定の時期に「教員になりたい」という気持ちを抱き始めた私でした。「教壇に立つ、そしてサッカーを指導する」という自己イメージが出来上がっていました。高校3年間練習に耐えた自分への自己肯定観、自信、そういったものから最終的に体育教員に絞り込みがききました。「本郷高校の卒業証書を受け取ったときの達成感、そしてこの証書を一生大切にする」、それくらい頑張った高校時代でした。今でも誇りに思っています。

進学先は、国士舘大学体育学部を受験し合格、入学します。読者の皆様は様々な年齢層でいらっしゃるかと思います。当時の国士舘大学といえば「質実剛健」、「真の国土」を輩出する、まさに「漢（おとこ）の大学」、といったイメージがありましたし、実際そういう面が強かったと思います。

大学でもサッカーを継続します。今はないと思いますが、下級生が宴会等で一芸披露する機会が多々ありました。そんな時、私は本郷高校校歌を高らかに歌い上げ「国土」ぞろいの上級生相手に「本郷高校ここにあり」の気持ちで向き合っていました。

現役時代は大所帯のサッカー部の中で色々なカテゴリーに所属し経験を積むことができました。この経験はその後の高校サッカー指導に大きく役立ちました。無名の選手もいる中、その後発足したJリーグ、ヴェルディー読売で活躍、日本代表キャプテンを務めた柱谷哲二（京都：京都商業）が同学年におり、日々多様な実力層の中でサッカーと向き合うことが出来たのは大きな財産となりました。

14 夢の教員

教員免許は国士舘大学で中高保健体育科を取得しました。教育実習は出身中学で行いました。大学4年次に東京都（中学）教員採用試験を受験しましたが一步及ばず不合格となります。当時は、考えられないくらいの高倍率で合格は至難の業でした。東京都および埼玉県私学協会と練馬区教育委員会それぞれに履歴書を出して教員になるチャンスをうかがいました。その結果、年明け1、2月のころ、埼玉県私立東京農業大学第三高等学校（新設3年目）からお誘いの連絡がありました。面接に行くとその場で非常勤講師の採用が決まり、その年4月から勤務、体育教員としてのキャリアスタートとなります。

新設校新任講師として生徒と向き合い、「指導者修行」の始まりとなりました。

15 夢の教員（農大三高時代）

年齢の近い教員が多く、職場に通うのが毎日楽しく感じられました。授業にしても部活指導（サッカー部）にしても教員経験、知識がない分、それまでの大学高校での経験から教えられるものをセレクトし教えていく感じでした。相手が高校生なので、本郷高校での経験を生かして教えることが多かったです。本郷高校との練習試合や（をしたり）、フェスティバルなどでの試合会場で阿出川先生と顔を合わせることもあり、教員の立場となって先生の一言一句に耳をそばだてたことが思い出されます。とにかく長かったです。4、50分話すことはざらでした。私が高校生の時も同じでした。

授業を進めるために「教科指導案、単元ノート」を作成しながら授業に臨みました。気がつくと5、6冊いや、7、8冊「教科教育法」に関する自分なりのノートが出来上がり自信がついてきました。

農大三高は赴任してみるとなかなかいい選手が揃う、いいチームでした。初めて関東大会予選県ベスト4に入るなど充実していました。4校リーグ上位2チーム抜けでした。西武台、浦和学院、武南そして農三でした。

そういうところから始まり、いい選手はいるのですがなかなか勝てない、「鍛えられていない」印象でした。赴任して4年目、これはいけると感じる選手が多くいた年も勝てなかったのです。

監督が夏休みにブラジルへ海外研修に1か月ほど行くことになり、当時コーチであった自分がチームを預かることになりました。7月下旬から夏休みいっぱいくらいの間でした。簡単に失点しない守備力、粘りのあるチームを目指し本郷で培った練習を思い出しながら、私は生徒と話し合いながら、練習をすすめました。研修から監督が戻

り大会に臨みました。2月の新人戦では県西部優勝し県大会に臨みましたがなかなか勝てません。4月の関東予選も県大会早くに敗退するのですが、5月に始まったインターハイ予選では選手たちが「覚醒」します。支部予選を勝ち上がり、ノーシードで県大会出場、あれよあれよと勝ち上がり気がつくベスト4でリーグ戦突入、武南、浦和学院、川口工業そして農三の4校のリーグ戦となり、上位2校がインターハイに出場できます。

さいたま市の荒川総合グラウンドは天然芝のグラウンドでした。武南には先制したものの1-3で敗戦でしたがいい試合でした。これは自信になった試合でした。関東予選では負けていた浦和学院に4-0で勝利します。この時点で2位、浦和学院が敗退確定します。1勝1敗同士の川口工業と農大三校との一騎打ち、勝ったチームがインターハイ出場となる大一番です。

ところが大雨、天然芝が使えず近隣の浦和北高校グラウンドが会場になりました。グラウンドは田んぼ状態でした。かつての農大三校はこのような「田んぼ状態」では実力を発揮できないチームでした。この課題は認識していたので、チームを預かった一か月の間に対策を立てていたことがここで活かされます。

相手も鍛えられたチームでお互い譲らず一進一退、後半終盤に1点をもぎとり1-0で勝利し初のインターハイ（静岡）出場決定となりました。西部地区からの全国大会出場も初めてだと聞いています。

静岡インターハイでは1回戦敗退でしたが、本郷高校での全国大会出場の経験と指導者となってはじめての全国大会出場が私の中でつながった瞬間でした。

いい選手がいた、まだこの頃は「昭和」のサッカーが若干通用した時代だったのかもしれませんが。しかしその後、このやり方だけではだめ、全然違うということに気づく時期がやってきます。

その時期に国士館高校（世田谷区）からお誘いがありました。迷いはありましたが、思い切って赴任を決めます。

16 夢の教員（国士館高校時代）

その年の3年後から男女共学になる国士館高校は私の母校国士館大学の係属高校です。大学と同じ世田谷で授業と部活動が完結する環境にも後押しされる形で新たな職場での活動が始まりました。全日制サッカー部の指導、大学生指導、定時制高校生指導とまことに忙しい日々が始まりました。

2年ほどたち、大学生と全日制高校、中学を指導することになります。部活動では中高サッカー部を指導しました。朝の中学生指導昼間の全日制指導、夜は定時制指導という時期もありました。

そのような環境の中で、1年目の指導が終わり、2年目の関東大会予選都大会でベスト4まで進みますが、関東大会出場は逃します。インターハイ予選も敗退し、選手権予選に突入、ベスト4まで進出します。決勝進出のための相手は早稲田実業高校でした。延長逆転勝利し初の決勝進出となります。決勝の相手は修徳高校でした。会場はあの、西が丘サッカー場、私が本郷高校の入学を決めるきっかけを得た思い出の競技場です。これも当時の私には感慨深いものでした。試合は前半PKから1点先制しますがだんだん押され、流れが相手に流れに行き結局後半の終盤にセットプレーから追いつかれ、最後は失点、1-2で涙をのみます。

選手としても指導者としても出場したことが無かった全国選手権の出場権が目の前で相手に持っていかれた瞬間でした。その直後の11月23日に今の妻と結婚します。披露宴では決勝に進んだ教え子たち全員が駆けつけてくれました。

3年目4年目はなかなか勝てず苦戦しましたが、少しずついい選手が集まるようになってきていました。6年目に卒業する代がいい選手が集まった結果、チームは仕上がりました。全国大会で準優勝する帝京高校とは1点差のきわどい試合を演じるほどのチームでした。しかしどうしても帝京高校の壁を破ることができず、全国大会出場は叶いませんでした。全国のトップレベルの高校と互角に戦える手ごたえを感じるとともに、自分のバージョンアップができた時代でした。今思うと農三の生徒もよかったです。全国大会で活躍するような選手を生で見る機会が少なかったように思います。また、戦術など考えあわせればきりが無いのですが、自分なりに、経験および指導力は高まってきている手応えのようなものは感じてきていました。（同窓生の先輩から見れば若気の至りと言われるのかもしれませんが）。

そんな時、一本の電話が私の運命を変えることとなります。

17 夢の教員（埼玉工業大学深谷高校時代①）

「埼玉県北部にある私学がサッカー指導者を探している、その話はどうだ？」先輩からでした。国士館高校はいい具合に仕上がってきていましたし、新しい環境で采配を振るう自分のイメージもある程度思い浮かびましたので、随分迷いました。しかし、意外と早い時期に返事をしました「行かせてください。」

何の情報もありませんし、自分も調べませんでした。赴任が決まってから周囲に「どんな学校なの？」と聞いたほど、私は無頓着でした。それが今の正智深谷高校（当時は埼玉工業大学深谷高校）だったのです。当時は全国的にラグビー部の活躍が知れ渡っている学校でした。正規採用という条件もありました。赴任してからサッカー・硬式野球が強化されている学校だということがわかりました。「とにかくやるしかない」の一心でした。1998年7月に声がかかり、赴任が9月でした。半年講師で次年度から本採用となりました。

18 夢の教員（埼玉工業大学深谷高校時代②）

赴任してわかったことがありました。「私学だからきっちりとした生活指導と募集、つまり部員を集めてくれ」という現実です。募集が大事だということ。東京では生徒募集は意外とたやすいものでした、例えばセレクション案内を出すと100人単位で集まるくらいでこちらの選び放題でした。そんな感覚でいたので、募集といってもたやすいぐらいの気持ちでいました。

ところがです。そんな甘いものではありませんでした。赴任後、新監督としてあいさつ回りに行きます。市内中学校サッカー部顧問、県北部各所のサッカー関係者へあいさつ回りをしますが、なんだか軽い、「壁」のようなものを感じました。「これはちょっと違うぞ」。

しかし、です。話しているうちに「小島先生はかつて農大三高にいらっしゃいましたか？」という反応が返ってくるようになります。私が国士館高校の前任校埼玉県農大三高である程度実績を残したことがうわさで広がっていき、訪問先の関係者の態度が変化していったのです。

本郷高校（高）の繋がりがここでもありました。本郷高校先輩である田口貴寛先輩（サッカー部OB）に挨拶したところ、「こういう人がいるよ」と紹介してくれました。長島氏（当時、クラブチーム「フェスタ」監督）という方で、北部を中心としたクラブチーム関係者を多く集めていただき繋がりを持たせてくださいました。本郷高校の繋がりに改めて感謝です。また、職場内でもサッカーに関わる職員もいらして「協力にバックアップするから」という言葉もあり、私一人ではなく、職場内にも協力者が、理解者が出来てきたということも私の信念が折れずに頑張れた理由の一つです。とにかく足を運びました。

グラウンドに話を戻します。赴任後ただちにグラウンドに行きます。当時本校は学校からグラウンド前の距離が歩いて20分ほどの距離にありました。まず驚いたのが、移動中生徒がサッカーソックスをはかずに素足のすねあたりにしぼりつけ、だらしなく歩いていました。

そしてグラウンドに到着するとそのグラウンドが「グラウンド」ではなく「ほぼ空き地状態、楕円形のグラウンド」だったのです。正直、サッカーをするような場所には見えませんでした。

何とかしないといけない、まずは草むしり、楕円の周縁が盛り上がり、その土を削ることから始めました。

「一日1コーナー」一週間かけてとにかく「四角いサッカー場」を作るところから始めました。

一週間で普通のサッカー場になり、「こうやってやらなきゃだめだぞ」と。しかし、そういう気持ちが心底生徒に伝わっていたわけではありません。

9月に赴任して2ヶ月が過ぎた頃、私との意識の差が離れ過ぎて、ある日の練習に5人程しか来ない時がありました。いわゆるボイコットです。話し合いになりました。全国を目指す私の考えとそうでもない2年生とこれは私にとって初めての体験でした。いろいろ話しましたが、結局、やるか、やらないか、ということで、全てを受け入れ、納得したわけでは無いと思いますが、とりあえず、みんなついてくることになりました。こんな状況でしたが、徐々に部員たちもやらなくてはいという意識や、挨拶や返事などが周囲に認められるようになり、部員たちも少し自信がついてきた感じがしました。そして、水道整備、屋根整備、ヘディングマシーン新調など、学校側に掛け合うと

協力してくれたことも大きかったです。徐々に態勢作りが整っていくなか、そこでいろいろな関係が始まり、人集めの大きな流れのきっかけができてきました。いい選手を送ってくれる流れが徐々にできてきました。

まずは態勢作りです。生徒たちの意識を高めるために全国に名を馳せている高校に胸を借り、強化に努めました。本郷高校をはじめ、本郷の先輩である佐熊さん、同期の篠田くん率いる桐光学園や同期の小森くんがいる東海大菅生、自分が指導者として修行した、国士館、農大三高など全国の強豪チームに大変お世話になりました。

しかし試合に臨みますが初年度は実績がついてきませんでした。

19 夢の教員（埼玉工業大学深谷高校から正智深谷高校に校名変更時代③）

就任 5 年目に、校名が変更になり、埼玉工業大学深谷高校から正智深谷高校になります。部員数も年々増え、チームとして年々力がついてきている実感が出てきました。

就任 7 年目、自分が集めた部員が揃って 5 年目の年に初めて、全国の扉が見えてきました。ベスト 4 まで勝ち進み、4 校でリーグ戦を戦い 2 位まで出場となります。初戦優勝候補の西武台に勝利、第 2 戦で浦和東に前半立ち上がり退場者を出し、圧倒的に不利な状況になる中、残り 1 分まで同点で粘ったのですが、得点を奪われ、0 対 1 で敗れます。最終戦引き分け以上で、出場が決まる第 3 戦は、市立浦和高校が相手でした。先制されるも追いつき、前半を同点で終えます。後半も一進一退でしたが、ロスタイムに失点し敗れ、目の前の全国大会出場がなくなり、総体予選県 3 位で終わりました。しかし、その年の選手権予選で初めてベスト 8 まで進みます。埼玉県ではベスト 8 からテレビ埼玉で放送されるため、これが大きな宣伝になりました。

就任 9 年目に全国高校選手権予選で初めて決勝まで進み埼玉栄と戦いました。結果は延長までもつれ、延長後半に P K を取られ敗れました。決勝まで進んだものの優勝と準優勝の違いを大きく感じました。全国で戦える、優勝旗を含め、もらえるカップの数など、優勝と準優勝では、全然違う。高校時代に阿出川先生から 2 位と 4 位は取るな、勝って終わることこの意味が痛感させられました。

就任 10 年目になると、リーグ戦を勝ち抜き、代表決定戦で大宮ユースに勝利し、プリンスリーグに昇格を決めました。この年は、地元埼玉での高校総体が開催されるため第 3 位までの出場が認められるビッグチャンスが巡ってきます。無事ベスト 4 まで勝ち進み、浦和東、埼玉栄、西武台の 4 校で対戦しました。初戦浦和東に勝利し、第 2 戦埼玉栄に引き分けです。第 3 戦西武台に引き分け以上で 3 位以内が確定します。3 年前のリーグ戦の反省を生かし、一進一退で戦い 0 対 0 の引き分けで 3 位ながらも、全国大会に出場を決めました。監督として、学校として初めてのインターハイ出場で、積み重ねてきたことは、間違いではなかったとホッとした感じでした。

※改行インターハイでは、一回戦京都代表久御山に 2 対 1 で逆転勝ちしたが、2 回戦で静岡県代表東海大翔洋に 0 対 1 で惜敗でした。この年の全国選手権予選でもインターハイでの自信をもとに戦い準々決勝で武南を倒してベスト 4 に進出、準決勝まで順当に勝ち進みますが、市立浦和に点が取れず、P K で敗れ 3 位で終わります。翌年は結果に結びつかず、選手権予選もベスト 16 で終わり厳しい年でした。

就任 12 年目、メンバーが 2 年生中心になったこの年の大会は、関東大会に出場します。第 2 代表でしたが良い経験になりました。インターハイ予選では結果に結びつきませんでした。選手権予選では決勝まで進みました。選手権出場の 2 度目の挑戦でしたが、西武台高校に大敗し、準優勝で終わります。

就任 13 年目は、ほぼ昨年メンバーが残り、期待の年となりました。新人戦では、順当に決勝まで進み、武南高校と対戦し両校優勝となり 2 度目の優勝となりました。今年は全国で勝負したいという気持ちが特に強く、期待していました。ところが、関東大会予選でまさかの 2 回戦敗退。インターハイ県予選のシード権を失います。インターハイ予選では、大雨の中、土のグラウンドで浦和南と対戦し P K で敗れます。チームの雰囲気もわからないところで、最悪だったようで夏の全体合宿でチームのまとまりが無いことに気づき反省しました。選手権予選では、ベスト 8 まで進み、浦和東と対戦します。しかし、相手のリズムを崩せず 1 対 3 で敗れてしまいます。勝負の年だったので、非常にショックでした。

就任 14 年目で大きく飛躍の年となります。昨年の反省を踏まえ団結の大切さを痛感したこの年、クラブ全体のスローガンを「一致団結」と定めチームのまとまりを意識しました。各チームにヘッドコーチを置き、トップチームだ

けでなく全体を把握できるように工夫しました。試合に出るメンバーの力だけでは勝てない、チームみんなで勝ち取るのだという気持ちを全体に伝えるようにしました。徐々にチームに団結心が芽生え、関東大会に出場し、初めて3位に入賞します。インターハイ予選では順当にベスト4まで勝ち進むも、代表決定の準決勝で西武台にPKで惜敗しました。

そして、選手権予選でも順当に勝ち上がり、決勝まで駒を進め3度目の全国の挑戦となります。相手は浦和東高校。緊張感の中、前半に初めて先制リードで終わります。全国まで後40分、後半も一進一退で進むが、ハーフウェイラインを過ぎたところからゴール前に放り込まれたボールが風に乗ってゴールインとなってしまう失点します。延長に入り両者譲らず、同点で終了。規定により両校優勝、PK対決となりました。結果は浦和東が4人目を外し、正智が5人目を決めて、ついに初優勝を決めました。



初の全国選手権大会では、京都府代表の京都橘高校との対戦に決まりました。夢の選手権出場、マスコミの取材や周りの反響が多く、優勝が決まった時のメールとLINEが100件を軽く超え、びっくりしました。表敬訪問、テレビ出演、雑誌の取材など、この大会の凄さを実感しました。

京都橘との試合は埼玉スタジアム2002で行われました。前半の立ち上がりで失点するも、綺麗なボレーシュートが決まり、同点で前半を終えます。後半にも立ち上がりで失点し劣勢が続きますが、自分達の形を作り、再度同点にする粘りを見せます。その後も決定機を作るが取りきれず2対

2のままPK戦となりました。緊迫した試合も、こちらがPKを失敗し敗れます。結局、京都橘が決勝まで進み準優勝します。この年は大雪で決勝戦が延期になった年でした。

就任15年目は、全国選手権大会で活躍した、オナイウ阿道など主力が残り、春先から関東大会予選優勝、関東大会準優勝(PK負け)、インターハイ出場、インターハイ3位と飛ぶ鳥を落とす勢いで活躍しました。2年連続の全国選手権をかけ、大会に臨みました。順当に決勝まで進み、市立浦和高校との対戦となりました。2年連続のプレッシャーもありなかなか点が取れず、終了間際にコーナーキックから失点し、敗れました。全国上位を狙えたチームだっただけに大変悔やまれました。この年はリーグ戦も優勝しており、関東プリンスの参入戦に出場しましたが、選手権の敗戦もあり勝ちきれませんでした。

就任16年目の関東大会予選は優勝し、関東大会本大会では戦えていましたが、インターハイ、選手権出場には届きませんでした。

就任17年目は、関東予選、インターハイ予選とも結果が振るわず、選手権予選に入ります。ノーシード1回戦から戦い、苦しみながらもなんとか決勝まで進むことができました。決勝の相手は西武台高校、前回0-6で敗れた相手、しかも今年は埼玉県内の全ての大会を優勝していました。誰もが西武台が勝つだろうと予想していた試合でした。しかし、試合の立ち上がり1分にチャンスが現れ、そのチャンスをものにして1点を先制。その後相手の猛攻に何度も苦しめられましたが、気がつく後半のロスタイムまで失点なく進み、あと少し、そんな気持ちで時計を気にしていたとき、終了のホイッスル。2度目の選手権出場を果たした瞬間です。2年生が中心のチームだったので、よく勝ってくれたと思う気持ちでした。全国大会では高知県代表明德義塾高校と対戦し、0対1で敗れました。

就任18年目は昨年のメンバーがほぼ残り、関東大会予選は優勝でした。インターハイ予選では、代表決定戦でPK負けをしてしまいます。選手権予選では、力を発揮し順当にベスト4に進みます。準決勝では全国総体で3位の優勝候補の昌平高校と対戦となりました。押され気味でしたが、しっかりとした守備から対応ができ、決定機もしっかり守り切って試合は進みました。後半の半ばにフリーキックのチャンスから、待望の得点が生まれます。この1点を守り切り2年連続決勝に進出しました。

決勝では、浦和南高校と対戦し、前半に得点してリードします。後半は追加点が取れず、終盤に入ると相手のロングスローから同点にされてしまいます。延長でも決着がつかず、PK戦となります。PK戦で先に相手が外し、これ

を決めれば勝ちのシーン、まさかの失敗、嫌なムードになりかけた時、主審がPKやり直しの指示、相手GKが早く動いたため、再びチャンスが現れます。これをしっかり決め、2年連続3回目の選手権出場が決まった瞬間です。連続出場の選手権大会ではとにかく、「全国で勝つ」を合言葉に初の勝利を目指しました。

初戦は、島根県代表の立正大津南高校でした。実績のある強豪校です。試合が始まると、自分達のリズムで試合が進められ調子が良かったのですが得点まで結びつかず無得点、そんな中、終盤に失点してしまい前半を0-1で終わります。また勝てないのかという不安もあったが、後半に期待しました。

後半は一進一退の中、ゲームが動きます。サイドからの攻撃で待望の得点で同点とします。そして終盤にPKをもらい、これをしっかり決めついに逆転に成功します。そして終了のホイッスル。選手権での初勝利を手にしました。

第2回戦では東京代表関東第一高校との対戦、試合開始早々ファールからPKを取られ、尚且つ、レッドカードを受け、一人退場となります。一人少ない状況で、考えてきたプランができなくなり、急遽プランを変えます。追加点を取られると、そこで試合はほぼ終わってしまう。失点をしないようにチャンスを待ちます。後半の残り少ない時、コーナーキックから起死回生の同点ゴールを奪います。PK戦で勝負かと思ったその時、シュートを打ったそのボールが相手の手に当たりハンドの判定、PKを獲得します(する)。これをきっちり決め、逆転に成功します。そして終了のホイッスル。一人少ない劣勢の状態からの逆転勝利でした。

この選手権で経験したことはとても大きかったです。3回戦は長野県代表松本国際と対戦、前半から主導権を握り、前半2-0で折り返し、後半も良いリズムから得点を重ね、4-0で勝利、初の無失点勝利、全国3連勝、ベスト8進出を果たします。ベスト4をかけ、等々カスタジアムを会場に準々決勝を優勝候補青森山田高校と対戦しました。相手に主導権を握られ、前半に0-1で終わります。後半立ち上がりにオウンゴールとロングスローで失点。0-3となります(る)。このままでは終われないという気持ちから、試合を押し返し、1点を返します。その後も諦めず攻め続け、相手のゴールを脅かすも得点に至らず1-3で敗れました。

この年は青森山田が優勝し、全国上位の光を感じることができました。だからこそ3年連続出場をしなければという思いでいっぱいでした。

就任19年目は、新人戦を決勝まで進み準優勝。関東大会予選も準優勝で関東大会に出場します。インターハイ予選はベスト8で敗れ、選手権県予選優勝にかけます。3年連続をかけたこの大会でしたが、準々決勝で敗れてしまいます。

この後の2年は、ベスト8止まりばかりで結果が出せない時期が続きます。流石に埼玉県内ではチームを研究され対応されていました。

就任22年目は、どのようにチームを作ってゆくか考えている時、世界を脅かしたコロナウイルスが発生します。

練習ができない、学校が休校、指導者になり何ヶ月もサッカーができないという考えられない状況を体験しました。このまま終わってしまうのか、そんな不安が続きました。関東大会、インターハイが中止となるも、選手権大会は実施できることになり、練習を徐々に再開。いろいろな制限のある中、なんとかチームが仕上がってきました。予選ではベスト4まで進みましたが、昌平高校に敗れ、3位に終わった。

就任23年目は、まだコロナの制限がある中、コツコツとチームを指導し、関東予選に臨みますがベスト4で敗れます。インターハイ予選では、守備の効果が現れ、初戦から1-0で勝ち続けます。

決勝に進み、勝てばインターハイ出場。相手は武南高校。ここもしっかり守れ、1-0で勝利。全て『ウノゼロ』で勝利し、久しぶりで3回目のインターハイを決めます。インターハイの相手は優勝候補、神村学園。コロナで辞退する高校もある中、なんとか試合に臨むも0-3で敗退となります。選手権大会ではベスト16からの登場で予選に臨みました。まさかの初戦敗退。11年ぶりにベスト8を逃す結果に終わります。

就任24年目は立て直しを図り、関東大会予選を4回目の優勝をしました。しかし、関東大会では練習試合で6-0で勝っているチームにカウンターから2失点し初戦で敗れてしまいます。インターハイ予選もこの嫌な雰囲気を断ち切れず、ベスト8で敗退。選手権予選では今年のトラウマもあって流れが悪く、PKで2年連続ベスト16で終わります。

就任25年目は、関東予選ベスト8、インターハイ予選ではベスト4まで進むも、武南高校に敗れます。選手権予選ではベスト8まで進みますが逆転負けをして敗退。しかし、リーグ戦で久しぶりに優勝し、プリンスリーグの参入戦へコマを進めることができました。参入戦ではジェフ千葉ユースと対戦し一進一退でしたが、0-1で敗れ終わります。

就任26年目の年は勝負の年、関東大会予選を優勝し、本大会では初戦を勝利、2回戦では、チーム底上げのため、敢えて控えの選手中心で臨みましたが結果敗れてしまいます。インターハイ予選も順調に勝ち進みベスト4まで勝ち上がり、西武台高校と対戦します。一進一退で0-0で延長に進み、延長前半に失点してしまうも、延長後半に追いつきます。PK戦に突入しましたが結局敗退します。インターハイは昌平高校が出場し、全国でも優勝します。

選手権予選では、インターハイ本大会覇者である昌平高校が圧倒的優勝候補であり、準決勝で当たる組み合わせでした。初戦を順調に勝つと、3回戦市立浦和と対戦します。リーグ戦で比較的圧倒して勝っていた相手でしたが、前半0-1と苦戦を強いられました。完全に受け身になっており、プレーが思うようにいきません。後半は、「チャレンジャー精神で臨もう」と選手を送り出し、2点を取って逆転でベスト8に進むことができました。準々決勝は浦和東との対戦、この日の第一試合で絶対的優勝候補の昌平高校が敗れるという波乱が起き、状況が大きく変わった形での試合でした。

立ち上がりからリズム良くせめ、前半を1点リードで折り返します。後半も得点を重ね結局2-1で勝利します。準決勝では優勝候補昌平高校との試合を倒した聖望学園との対戦でした。前半の立ち上がりのピンチに耐え、前半に1点をリードして折り返します。後半も安定した守備で失点を抑え1-0の勝利で8年ぶりの決勝に進むことができました。

決勝の相手は、浦和学院高校でした。準決勝で優勝候補の一角であった西武台高校に勝利し決勝戦へ駆け上がってきた勢いのあるチームです。決勝戦は、前半に得意のコーナーから得点し1-0でリード、後半も安定した守備で完封。4度目の全国選手権大会の出場を果たす結果となりました。

全国大会では、1回戦、長崎県代表長崎総附高校と対戦し2-1で勝利、2回戦は福岡県代表東福岡高校と対戦したが0-2で敗れました。

就任26年目は、監督から総監督になり、若い指導者を前面に新たな関わりを始めています。

20 これまでもこれからも「夢の教員」を貫く (終わりに)

自分もスキルアップをしてチーム強化を図ろうと思い至り、赴任5年目2004年5月に県内研修センターに「C級ライセンス」を取得しに行きました。4泊5日の厳しい研修でした。「資格を持っていると生徒に対する示しがつく」という思い以上に、インプットの大切さを痛感する研修でした。ワールドカップ連続出場を続ける日本サッカーの現在を見ると、長期的視点に立ったさまざまな方策が形になってきていると感じます。

昭和、平成、令和をまたぎ30年近く、指導者としてサッカーに関わる中で、サッカー界全体の改革や世界を見

据えた諸事業の成り行きに興味関心は尽きません。正智深谷高校サッカー部総監督として様々な人間との関わりは今後も続きます。130人程度の高校生、各カテゴリーで指導に当たるサッカースタッフ、保護者、サッカー関係者、職場教職員。常に社会の変化に対する意識のアンテナの感度を上げ、性別年齢を問わず誰とでも議論を厭わず、本音で語り合う雰囲気作りにも配慮しています。



これまでの指導経験で培った「一致団結」というモットーをいかに保ち、次の代へいかに「継承」していくか。サッカー人生の総仕上げの時期に入ったこの時期に、改めて自分の原点、始まりの場所といえる本郷高校での3年間を大いに語り尽くす機会を得ることができたことはこの上ない喜びとなりました。

今後も本郷高校卒業生としての自覚と誇りを忘れず、サッカーを通じての人作り、全国大会出場という大きい夢を実現するための組織作りに励む所存です。

今後の本郷高校同窓会の瑞々しく活発な諸活動の充実と学園の更なるご発展を祈念し結びと致します。

令和7年12月 埼玉県私立正智深谷高等学校サッカー部 総監督 小島時和



【参考資料】正智深谷高校男子サッカー部 戦績

	新人戦	関東大会予選	関東大会	IH予選	IH	選手権予選	選手権	リーグ戦	Jリーガー
2001				1回戦敗退		1次トーナメント敗退			
2002	ベスト16	ベスト8		1回戦敗退		2次リーグ敗退			
2003	ベスト16	ベスト16		ベスト8		2次リーグ敗退			
2004	支部敗退	ベスト16		ベスト8		ベスト16			
2005		ベスト16		3位		ベスト8			
2006	ベスト8	1回戦敗退		1回戦敗退		ベスト16			新井章太
2007	ベスト16	1回戦敗退		ベスト16		準優勝		3位	
2008	優勝(初)	プリンス		3位	2回戦敗退	3位		優勝	金子昌広
2009	ベスト16	2回戦敗退		2回戦敗退		ベスト16			
2010	ベスト8	準優勝	Bブロック3位	ベスト8		準優勝		S2優勝	福田友也
2011	優勝(2)	ベスト16		ベスト16		ベスト8		優勝(初)	内田航平
2012	ベスト8	準優勝	Bブロック優勝	3位		優勝(初)	1回戦敗退	3位	
2013	3位	優勝(初)	Aブロック準優勝	準優勝	3位	準優勝		優勝(2)	オナイウ阿道
2014	ベスト16	優勝(2)	Aブロック1回戦敗退	ベスト8		ベスト8		4位	諸岡裕人
2015	ベスト8	1回戦敗退		1回戦敗退		優勝(2)	1回戦敗退	2位	
2016	3位	優勝(3)	Aブロック1回戦敗退	3位		優勝(3)	ベスト8	4位	新井晴樹
2017	準優勝	準優勝	Bブロック2位	ベスト8		ベスト8		3位	梶谷政仁、孫大河
2018	ベスト8	1回戦敗退		ベスト8		ベスト8		4位	オナイウ情滋
2019	準優勝	ベスト8		ベスト8		ベスト8		3位	山田裕翔
2020	3位	中止		中止		3位		中止	
2021	中止	3位		優勝	1回戦敗退	3回戦敗退		2位	
2022	中止	優勝(4)	Aブロック1回戦敗退	ベスト8		2回戦敗退		2位	
2023	ベスト8	ベスト8		3位		ベスト8		優勝(3)	
2024	ベスト16	優勝(5)	Aブロック3位	3位		優勝(4)	2回戦敗退	2位	
2025	ベスト16	ベスト16		ベスト16		ベスト16		4位	
2026									
優勝回数	2回	5回	出場8回	1回	出場3回	4回	出場4回	3回	11名

埼玉県・過去20年間の全国高等学校サッカー選手権大会出場校

	優勝	2位
昌平	7	1
正智深谷	4	3
西武台	3	2
市立浦和	2	3
浦和東	1	1
浦和南	1	3
埼玉栄	1	1
武南	1	2
浦和学院		1
成徳深谷		1
武蔵越生		1
浦和西		1